

【NPJ通信・連載記事】色即是空・徒然草

鈴木大拙—世界人としての日本人

村野謙吉

「あらゆる時代の日本人のなかで、知的または精神的に、日本国の外の世界にもっとも広く、もっとも深い影響をあたえたのは、鈴木大拙である。 (加藤周一『日本文学史序説下』)



(晩年の鈴木大拙)

今、わたしは、明治・大正・昭和の3代を、当時の西欧の著名な知識人と交流し、東洋の「靈性的自由」を生き抜いた一人の著名な人物を、懐かしく思い出している。

その人物は鈴木大拙 (1870-1966)である。

鈴木大拙は一世紀近い長寿 (96 歳) を享けたから、彼の生きた同時代人には、明治、大正、昭和を彩る多彩な人物像が重なっている。

彼の二十歳代には、勝海舟、徳川慶喜、福沢諭吉、伊藤博文、内村鑑三、新渡戸稲造、岡倉天心、夏目漱石らがいた。彼らはすべて、伝統的日本の価値観に挑戦してくる西欧文明の侵出をひしひしと感じていた。

初めの4人は基本的に外面的政治的世界に関わった人物たちであるが、後の4名は近代西欧文明に直面して、日本人としての生き方を精神的な面から見つめた人物たちである。

彼らはそれぞれに渡航して欧米の文明を直接体験し、思想と文化の観点から西欧の侵出によって顕在化されてきた日本と日本人の存在意義の問題に直面した。

内村鑑三と新渡戸稲造は、ともに札幌農学校に学び、函館に駐在していたメソジスト系宣教師から洗礼を受けてクリスチャンとなった。

その後内村は1884年に私費で渡米したが、拝金主義と人種差別の流布していたキリスト教国の現実を知って幻滅、4年後に帰国してアメリカのキリスト教と一線を画した日本独自の無教会主義を唱えた。

彼が愛したのは「二つのJ」すなわちJapan（日本）とJesus（イエス・キリスト）であった。

彼は「How I Became a Christian (『余は如何にして基督信徒となりし乎』)」と、「Representative Men of Japan (『代表的日本人』1894)」を發表した。

新渡戸は1884年、「太平洋の架け橋」になりたいと渡米、伝統的なキリスト教信仰に懐疑的となり、やがてキリスト友会(クウェーカー)の正式会員となった。1891年、妻メアリー・エルキントンを伴って帰国。

その後、国際連盟事務次長になるなど海外での活躍は周知のことである。
彼は英文の著述「Bushido: The Soul of Japan (武士道；1899)」を書いた。

内村も新渡戸もクリスチャンとなったが、こころの底には、それぞれが理解する独自の日本人観を維持していた。

岡倉天心は、米人フェノロサの影響のもとに東洋の美的文化価値と日本文化における道教の意義に目覚め、「The Awakening of the East (東洋の目覚め；1902)」、「The Ideals of the East (アジアの理想；1903)」、「The Awakening of Japan (日本の目覚め；1904)」、「The Book of Tea (茶の本；1906)」などの英文著作を發表して、国内外で注目された。

天心はアジア人としての日本人であることにわが身をおいて精神的に自足していたようだ。

ちなみに、フェノロサは日本文化に安住して仏教徒となり、彼の墓は天津市の法明院にある。

以上の三人と比較して、夏目漱石はどうか。

漱石は、1900年、文部省より英語教育研究のため英国留学を命じられ渡英。

「夜下宿ノ三階ニテツクヅク日本ノ前途ヲ考フ・・・」など、おそらく当時の先進文明としての西欧と比較された日本の現状に様々な思いを抱きつつ「猛烈の神経衰弱」に陥り、漱石は急遽帰国を命じられ、1903年1月横浜港に到着した。

漱石はキリスト教への関心を深めることはなかった。

しかし近代西欧の生活をロンドンで体験して西欧世界のハードとソフトの巨大な資産に大きな衝撃を受けたことは確かである。

彼の小説『心』は明治天皇の御大喪と乃木將軍の殉死を中心として、西欧文明が東アジアに怒濤のように侵襲してきた時代の奔流の中で、明治がだんだんと遠くなっていく時代に直面した悩める知識人の心象風景のようだ。

漱石は鎌倉の円覚寺に参禅したり、『心』には、仏教書を読む一方、時にかたわらの聖書を読んでいた悩める浄土真宗の青年が登場したりしているが、漱石自身は仏教にも深く立ち入らなかった。

西欧文明に衝撃をうけた漱石であったが、晩年の心境は「則天去私」であったといわれる。
伝統的な漢学的教養の価値と仏教の無我とを折衷したようなところに、自身の安心をえたようである。

では鈴木大拙の場合は、どうか？ 先の4名の人物と、スケールの大きな行動力と志において大いに違う。

鈴木大拙、本名、鈴木貞太郎は明治3年(1870)年、金沢市に四男一女の末子として生をうけた。6歳の時、医者であった父と死別し、20歳で母と死別したから、彼の耐乏生活は幼少期からはじまった。明治初期の石川県の乏しい教育機会のなかで漢文を熱心に習得し、しかも限られた教育環境のなかで英語学習にも努力した。

しかし彼は岡倉天心、内村鑑三、新渡戸稲造らと違って、生来的に「自己の究明」に関心があったから、20歳から禅に関心をもちはじめて富山県の禅寺で参禅をはじめめる。

以下、彼の生涯の概略を紹介する。(2)

- ・21歳：明治24年(1891)、上京して東京専門学校(今の早稲田大学)に学ぶが、正式に卒業したわけではない。彼自身の説明では、石川県での初等、中等教育以外、正式に終了した学校はないという。この年7月から、鎌倉円覚寺の今北洪川老師について参禅を初める。
- ・23歳：明治26年(1893)、彼は3月遷化した洪川老師の跡を継いだ釈宗演老師がシカゴの万国博覧会における世界宗教会議に出席するにあたって、その原稿を英訳、それを夏目漱石に添削してもらう(?)。
- ・24歳：明治27年(1894)、8月、日清戦争開戦。
- ・25歳：明治28年(1895)、参禅して見性を得、宗演老師から大拙の居士号を与えられる。この年4月、下関で講和条約締結。
- ・27歳：明治30年(1897)3月、釈宗演の推薦により、中国文献などを出版しているポール・ケーラス(イリノイ州)のもとで働くために、イギリス船エス・エス・ゲーリック号で渡米。以後11年滞米。その間、極東においては、明治37年(1904)2月から明治38年(1905)にかけて日露戦争があり、日露両国は米大統領ルーズベルトの勸告をいれて9月ポーツマスで講和条約の締結があった。
- ・38歳：明治41年(1908)、米国を離れてイギリス、フランス、ドイツを訪ねる。
- ・39歳：明治42年(1909)4月、スエズ運河を経て12年ぶりに帰国。この年の10月26日、ロシアの特別列車でハルビンに到着した伊藤博文が朝鮮の独立運動家・安重根によって射殺される。
- ・40歳：明治43年(1910)4月、学習院教授となる。
- ・41歳：明治44年(1911)12月、来日した米国外交官の長女・ビアトリス・レーンと横浜の米国領事館にて結婚。



(ビアトリス・レーン・スズキと鈴木大拙; Collection of D.T.Suzuki Museum)

「二人の出会いは大拙のヴェーダ協会での講演会だった。当時大拙はアメリカの心理哲学者ウィリアム・ジェームズ思想に深い関心を抱いていたが、女子大卒のビアトリスはジェームズの講義を受けていたこともあり、共通の話題を通して知り合った。」(3)

- ・ 51歳：大正10年(1921)、西田幾多郎のすすめにより、真宗大谷大学教授となる。
- ・ 63歳：昭和8年(1933)1月、ドイツにヒトラー政権成立。
- ・ 64歳：昭和9年(1934)4月、朝鮮・満州・中国を旅行。
- ・ 66歳：昭和11年(1936)6月、ロンドン開催の世界信仰大会に姉崎正治、賀川豊彦と参加のため日枝丸でアメリカ経由で訪英。ロンドン大学で講演。
9月、大拙はイギリスからドイツに行き、リュースハイムでビアトリス夫人の従姉妹等に会い、当地の「素朴な人々の口からきいたドイツ人の宗教感情や、ナチス運動に引かれていた様子を詳しくした手紙」を円覚寺管長・朝比奈宗源に送る。フランクフルトやベルリン等を訪問後、再びイギリスへ。
10月、11月、ケンブリッジ大学、エジンバラ大学、オックスフォード大学等で日本の仏教文化について講演。オックスフォード大学では座禅会を開く。その後、サザンプトンよりプレーメン号にてアメリカへゆき、コロンビア大学、ハーヴァード大学、シカゴ大学、カリフォルニア大学、シカゴ美術館、ボストン日米協会、ロスアンゼルス西本願寺等で講演。サンフランシスコから日本へ帰国。
- ・ 69歳：昭和14年(1936)7月16日、ビアトリス夫人、東京築地の聖路加病院にて逝去、61歳。
- ・ 75歳：昭和20年(1945)6月7日、大拙の心友とも言うべき西田幾多郎、逝去、75歳。
- ・ 78歳：昭和23年(1948)12月23日、東條英機ら7名の処刑。12月24日、岸信介、児玉誉士夫、笹川良平ら釈放。
- ・ 79歳(昭和24年;1949)～94歳(昭和39年;1964)まで、毎年のように欧米諸国に長期滞在し、またメキシコ、インド等をも訪問し、講義と講演活動を行う。
- ・ 94歳：昭和39年(1964)7月、ハワイ大学における第4回東西哲学会議に出席。
- ・ 96歳：昭和41年(1966)7月11日、逝去。戒名「也風流庵大拙居士」。遺骨は、鎌倉東慶寺墓地、金沢市の鈴木家墓地、高野山奥の院墓地に三分されて埋葬。

大拙は明治30年(1897)、27歳で渡米し単身11年余滞在、その後さらに1年間を欧州で過ごした後も、精力的に欧米その他の諸外国を訪問した。

そこで欧米人の人情の機微に通じ、当時の著名な西欧の知識人らと交流したから、西欧のユダヤ・キリスト教的情念と技術文明について、相対化した観察と思索を十二分になすことができた。

彼は禅の仏道をとうして文明的価値観を超えた「自己の究明」という普遍的智慧の獲得に努めていたから、単身欧米の文明に囲まれていても日本に生まれた自己に対する静かな自信を失うことはなかった。

彼は西欧思想の観念的思想体系や、その論理的言語表現に魅了されたが、精神的現象さえも物象化するさまざまな西欧的イデオロギー的思考に泥むこともなかった。

さらに、現在の世界を支配している、エリート主義にもとづく西欧知識人の世界支配的思考、そして「西欧知識人たちの思想傾向と彼ら知識人たちの個人的生活」の乖離に気がついていたようだ。

「知識人たちの個人的生活」とは、現在まで受け継がれている欧米エリート層(大学教授を中心とした知識層と政財界のエリートたちの複合体)の性的行動に関わることである。(4)

鈴木大拙は、27歳（明治30年; 1897）から94歳（昭和39年; 1964）まで、国内と海外では欧米を主として活動したが、大拙の80歳代からの海外渡航歴を見れば、その行動力に驚嘆する。

しかも、大拙の西欧体験は、一般の外国旅行者、商社マン、通常の留学経験者らの経験と違って、彼が生きていた時代の欧米の著名な知識人との面識を通じた知的体験であった。

欧米知識人たちは、それぞれに大拙についての評価をしていただろうが、西欧の知的伝統に無い特異な禅という仏教言説と坐禅という身体的実践を体現した人物として大拙に一定の敬意をもって接したのである。

では、大拙は、どのような人物たちと会っていたのだろうか。

イギリスにおいて仏教の普及につとめた人物にロンドン仏教会（1924年設立）の創設者クリスマス・ハンフリーズがいる。

彼は1946年、東京裁判で判事を務めるために来日した際、鎌倉の大拙を訪ねたことをきっかけに、以前から面識のあった二人はさらに深い親交を持つようになった。

大拙は渡英の時は彼の私邸に宿泊した。

ちなみに、1946年4月23日と24日の2日間、禅を世界に広めた功労者として、鈴木大拙は昭和天皇皇后両陛下のために、仏教概論をご進講。4月30日は、カトリック信者の東京帝国大学教授・田中耕太郎が「キリスト教二就テ」と題してご進講。ローマカトリック教とギリシャ教の差違、イタリア国首相ベニト・ムッソリーニがヴァチカン国と条約（一九二九年のラテラノ条約）を結んだ理由、カトリック教が布教に格別熱心な理由につき天皇から御下問があったようだ。

大拙は、戦後、皇室との連絡調整役を務めたといわれる R.H.ブライスとも昵懇であった。

ブライスは、当時の皇太子の英語教師であり、昭和天皇の人間宣言の起草に加わったことが知られている。

俳句についての著書をだして、今日にいたる英語俳句普及の先駆者となった。

鎌倉東慶寺にあるブライスの墓は終生の友、鈴木大拙の墓の後ろにある。

80歳以降の大拙の活動を以下に紹介するが、その行動力には驚嘆させられる。

- ・ 1950年（昭和25年）、大拙(80歳)は、前年の9月からハワイ大学で禅の講義を行っていたが、2月にハワイからアメリカ本土に渡り、クレアモント大学において「日本文化と仏教」を講義。ついでロックフェラー財団の委嘱により、イェール大学、ハーヴァード大学、コーネル大学、プリンストン大学、コロンビア大学、シカゴ大学において「仏教哲学」を講義。
- ・ 1951年（昭和26年）2月～6月、大拙（81歳）はコロンビア大学で「華嚴哲学」を講義。夏季休暇に帰国した後、9月～翌年2月まで、クレアモント大学で講義。
- ・ 1952年（昭和27年）2月、大拙（82歳）はコロンビア大学のゲスト・プロフェサーとなり、禅哲学を講義。夏季休暇に帰国後、9月からコロンビア大学で講義を続行。
- ・ 1953年（昭和28年）、大拙（83歳）は6月から10月まで渡欧。
6月は、イギリス、スイスを旅行、ロンドンで講演。
7月、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダを旅行、パリで講演。
8月～9月、イギリスからスイスのアスコナで開催の「エラノス会議」に出席。その後、イタリアを旅行してローマにて講演後、イギリスへ。
9月、ロンドンからアメリカへ行き、コロンビア大学にて講演、「禅の哲学と宗教」を講演。
この年の欧州旅行では、カール・ユング、マルティン・ハイデガー、カール・ヤスパース等に会う。

・1954年（昭和29年）、大拙（84歳）。1月、ニューヨーク市に居を構える（1958年まで）。

以後、94歳まで毎年、アメリカでの講演、研究生生活を続けながら、渡欧と帰国を繰り返す。

1953年夏に撮影された、ドイツ・フライブルクで撮影された下の写真の人物たちは、だれだろうか？



左端からデュルクハイム、女性、鈴木大拙、ハイデガー、同夫人である。

ハイデガー（1889 - 1976）は、著名なドイツ人の哲学者で『存在と時間』の著者。

ハイデガーは職業的には形而上学者の著名な大学教授であるが、形而下の私生活では教え子との不倫でも著名である。

35歳当時、大学で哲学の教授を務めていたハイデガーは、当時18歳であった教え子の、ハンナ・アーレントと交際。独身ならともかく、当時ハイデガーには妻との間に2人の子供がいた。だから不倫である。

ハイデガーの形而上・形而下の全身的問題は、彼がナチスにかぶれていたことと、学生の愛人ハンナ・アーレントがドイツ系ユダヤ人だったことだ。

ユダヤ人的情念は、非ユダヤ人の欧米のキリスト教徒にも理解しがたいことかもしれないが、性愛は形而上学の世界解釈の範疇ではないのだろうか。それとも形而上学をも超えているのだろうか。

筆者は、人類史の根本的動因は「3つのセイ」、すなわち「聖と性と政」が一体化した情念と考えているので、著名な形而上学者が形而下の実践行動を起こしても奇妙なこととは思っていない。

しかしハイデガーについて通俗的なことに言及したのは、鈴木大拙の言う、西欧知識人の一般的傾向として「知識人と思想」の乖離が思い浮かぶからである。

では、この写真の左端に映るデュルクハイムとは何者か？ 彼はナチズムに関わる人物である。

大拙が面識を得て意見をかわし交流したと思われる主要な人物には、中国人では胡適 (思想家・外交官) と魯迅 (作家)、西欧人では、カール・ヤスパース (哲学者)、マルチン・ハイデガー (哲学者)、ジョン・ケージ (音楽家)、オルダス・ハクスレー (作家)、カール・ユング (精神分析学者)、エーリック・フロム (精神分析学者)、ポール・ティリッヒ (カトリック神学者) などがいる。

エーリック・フロムとは『禅と精神分析 (ZEN BUDDHISM & PSYCHOANALYSIS; 1960)』を共著で出版している。

1950年代、アメリカのビート世代は大拙におおいに影響をうけたといわれる。

1959年、ハワイ大学から東洋を代表する知識人三名が選ばれて名誉博士号が与えられた。インドのラダクリシュナン (インド哲学者、インド大統領)、中国の胡適、そして日本の鈴木大拙である。

1964年4月、鈴木大拙、94歳は、インドのアジア協会よりバートランド・ラッセル (哲学者)、アーノルド・トインビー (歴史学者) らとともに第一回タゴール生誕百年賞を授与された。

しかし、再三強調するが、鈴木大拙が西欧の思想と思想家に触れて感じていたことは、思想と思想家自身の乖離であったと思われる。

そのような西欧の知識人に高等教育で影響された学生たちが経済人や政治家として社会で活躍すれば、自ずから知的支配欲と下半身の欲求に扇動された様々なエリート層を構成するのも当然であろう。

著名な近現代西欧知識人たちの性癖の研究には、ポール・ジョンソンの書『Intellectuals (知識人たち)』が好著である。

英語で東洋の立場を世界に発信する重要性を指摘し、日本人にとって漢文の素養が大切であることを強調し、英語で世界に発信する仏教者・鈴木大拙の言葉を引用したい。

「自分は世界人としての日本人のつもりでいる、そうした日本に一東洋に一、世界の精神的文化に貢献すべきものの十分に在ることを信じている。・・・

西洋文化の精神を体得することは中々容易なことではない。

日本文化のみが保存に価するものだと考えたり、西洋文化は、物質的だ、経済的だ、政治的だとのみ考えたりして、今度の戦争を起こしたような人たちには、到底わかるものではない。・・・

それからまた日本は敗けた、アメリカはえらい国だ、何でも彼方の真似さえして跳んだりはねたりして行けば、若いものの能事畢れりとすまして行くものが多くなったら、これまた大変だ。

要するに、東洋でも西洋でも、政治の機構は自由を主としたものでなくてはならぬ、そうしてこの自由の出处は靈性的自由である。」 (鈴木大拙「明治の精神と自由」1947年)

鈴木大拙は、彼と面談した多くの人々が語っているように、だれに対しても一視同仁の態度で「随処に主」となって接していた。

世界的な著名人でも、お手伝いの女性にも同様であった。

「この人の真価を十分に知るには対面するほかはない。

鈴木大拙博士は儒教・道教・仏教などアジア古来の伝統にみられる「君子」がもつ名状しがたい資質を、すべて体現しておられるように思われた。

博士と会って一緒にお茶を飲みながら、この「人」に会えたと感じた。それは、やっとわが家に帰り着いた境地にひとしかった」(カトリック神学者トマス・マートン)

当時の記憶は定かでないが1964年前後、わたしは鎌倉円覚寺で朝比奈宗源老師の下、夏季参禅会に参加していた。そこで鈴木大拙先生の講演を拝聴した。

講演の話の内容よりも、なぜかわからないが、この「人」にお会いしたいと思った。

どのように連絡をしたのか定かな記憶がないが、1964年12月、20歳過ぎの学生のわたしは鎌倉の東慶寺に先生をお訪ねした。

大拙先生は、文化勲章受章者、世界の D.T.Suzuki、94歳の世界的著名人である。

しかし先生は、無名の学生の自分に、まったく自然に接して下さった。

私は三島の龍澤寺で中川宋淵老師の下、禅のまねごとをしていた時の体験を語った。

般若心経の最後の句「羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶」の意味を尋ねた。

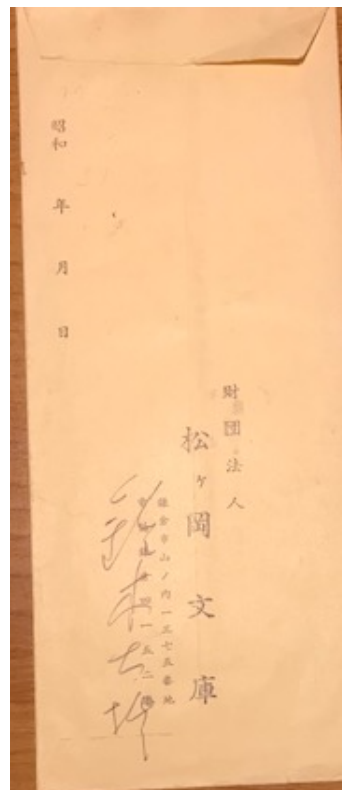
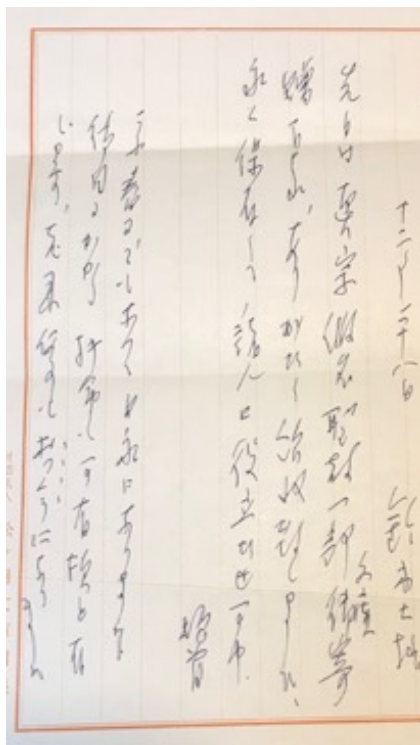
先生は、私が浄土真宗ということで、親鸞についているいと質問があった。

二人並んで椅子に腰掛けている傍に秘書の岡村美穂子氏がいて、一時間ほど過ごしたであろうか。

私が退席する時、応接間から玄関まで見送って来て下さった。

すこしよろめいて、おっとどっこい、とかいってにっこり笑ったことが思い出される。

その後すぐに、鎌倉から大拙先生の丁寧な手紙(12月28日付け)が東京都中央区小田原町(現在、築地)のわが家に届いた。



鈴木大拙師から筆者への封筒の裏と手紙(部分)

「来春にでもなって日永になりましたら御目にかかり」云々とあって、
「何事もおっくうになりました」と結ばれていた。

1966年、大拙先生は、わたしの家の目に前にある聖路加病院で逝去された。
享年96歳であった。

鈴木大拙に実子はおらず、弟子もいない。
彼は徒党を作る様な師ではなかったし、自分は学者ではないともいっていた。
大人物の謙遜ではなく、本当に、そうだと思う。

彼は世界で一級の著名な知識人と交流があったにもかかわらず権威や名声の奢りとは無縁の人であった。
そして「自己の究明」を求める鈴木大拙は、特に戦後の多くの日本の知識人たちに見られる西欧に憧れている思想家ではない。

晩年の大拙に身近に接していた志村武（著述家）が、ある時、率直な（不躰な）問いを大拙先生にした。
“親鸞聖人や道元禅師と比べてみると、先生はどこか違うと思うのですが、どこが違うのでしょうか？”

大拙は答えた、“わたしには真実（まこと）がない。”
自分には「まこと」がない、と鈴木大拙は自らを語った。

しかし「まこと（真実）」の欠如は、「自己の究明」に関心のない企業と官僚と教育界のエリートたちに共通する人格的欠陥ではないのか。

「まこと」の欠如したエリートたちが現代の政治・経済・教育界を動かしているのではないのか。
「霊性的自由」に関心のないエリートたちが、「支配する自由」を当然のこととして現代社会で振る舞っているのではないのか。

未曾有の異様な世界が展開しているを感じながら、60年近く前、鎌倉で鈴木大拙先生にお会いしたことが、昨日のこのように眼前に思い出される。

大拙先生は偉人というより、わたしには不思議な「ただの人」であった。
わたしは、この世で、この「人」にお会いできて満足だった。

村野謙吉（むらの けんきち）：仏教・日本文化・G.オーウェル研究家・翻訳家・コラムニスト（Mainichi Daily News (1978 - 1983)など）。訳書：ヴィンセント・ステイヤー『プリンティングデザイン・アンド・レイアウト：欧文書体とレイアウトの常識』など。

参考文献：

- (1) 「神（ゴッド）が歴史を支配する思想（God is in control of history）」；J.B. Phillips: The Revelation of John; The New Testament in Modern English
- (2) 『鈴木大拙一人と思想』（久松眞一・山口益・古田紹欽編、岩波書店、1971）等を参考。
- (3) 「松岡正剛の千夜千冊」1808・2022年8月26日：『近代仏教スタディーズ』（大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編・法蔵館2016）。
- (4) DISSIDENT VOICE: Jeffrey Epstein and the Spectacle of Secrecy; by Edward Curtin / August 15th, 2019.
Mirror: 2024-09-16: Drunkenly begging for abuse pics - Huw Edwards' sick double life exposed in full.など。

* 筆者の文章や引用文に誤記、または個々の箇所の内容について誤りなどがあれば、ご指摘を受けて感謝をもって訂正したい。